

敬天千里眼情報

呉市新庁舎建設工事で波乱！入札予定業者4社全て辞退 『黒い霧に覆われた談合都市』を過去事件から徹底検証③

予定通り、本件関連記事は敬天新聞184号(平成25年5月1日)に掲載はするが、その前に呉市(小村和年市長)の直近の動きを報じておきたい。

呉市は、先だつての呉市新庁舎建設工事入札で、全業者入札辞退という、発注者側からすれば大恥をかかされ入札中止に追い込まれた。辞退した4社は、①大成建設・五洋建設・増岡組、②清水建設、③鹿島建設・大之木建設、④戸田建設、神垣組といわれ、落札は①の大成建設が代表企業の企業体だと本命視されていた。

「予定価格内で出来ない」と、お流れとなった入札だが、小村和年市長の対応は迅速であった。本来なら、議会承認を得た予算(予定価格)に、直前になって文句をたれる業者など無視して、再公告したのち辞退者以外の業者で入札すればいい。若しくは、入札不調の現実を重く見て、全てを仕切りなおしのもと事業の再検討に時間をとるのが、議会制民主主義たる自治体を仕切る首長の正しい在り方と考える。

ところが、4月19日10時、準備期間も十分にたらず庁舎建設検討委員会が急遽開催され、前回予定価格から3億4650万円を上積みして、その1時間後には入札再公告を行うという、怒涛の早業をやったのけたのだ。

事業全般の再検討はおろか、上積み分に関する明確な説明もないまま、急ぎ足での決定を語る委員の声も当然のように出たが、否定的な意見は黙殺されたと言う。

何より問題視せねばならないのは、予定価格が上昇変更されたことで「予定価格では出来ない」として前回辞退した業者が、改めて入札に参加する理由付けを得た事である。

小村和年市長は、何が何でも入札を早めたい。又一つに、入札辞退の業者には再入札の道筋を付けなければ為らない、何やら複雑な大人の事情を抱えていたのだろうか。

どうあれ、前回入札業者の辞退によって、予定価格が上積みされたのは事実であり、もし事前の話し合いで辞退を取り決めていたとするなら、団結した業者の大勝利といったところか。しかし、事はそれほど単純ではなさそうだ。

そもそも、辞退した理由は落札者と目されていた大成建設JVが、談合の発覚を恐れ腰が引け、直前辞退となったともいわれる。入札参加決定まで相当な準備期間をようしたなかで、直前になって予定価格で出来ないとは、自社の積算能力不足を吐露することに等しい。つまりは、業界に恥を晒す事になっても、談合発覚よりはマシだとする企業判断が為されたと見るのが妥当であろう。

焦ったのは構成員の呉市地元業者である増岡組だ。実際に談合を仕切っていたのは増岡組であったとも聞く。代表企業が抜けたら増岡組にはどうすることも出来ない。いかに呉市公共事業の主導権を握っていようと、本件事業の頭を張ることは企業規模からしても不可能である。既に、大成建設・五洋建設は再入札には不参加の方向だともいう。頭を失った増岡組は、大林組に接触し泣きついているともいうが・・・。

敬天新聞社

<http://keiten.net/>

吉永健一